

# クンデラの小説における「秘密」

## 引き裂かれた恋人たち

中里 まき子

ミラン・クンデラの小説では、歴史や記憶、忘却といった主題とともに、人間の羞恥心の問題が扱われる。監視や盗聴、密告によって市民の私生活を奪い取る全体主義社会を経験した作家は、羞恥心に対し加えられる攻撃が、物理的な暴力以上の破壊力を持ち得ることを看破した。この認識からクンデラは、「秘密」を持たずには生きられない人々の姿を小説に描いている。

クンデラの名は、「プラハの春」やソ連のチェコ侵攻といった歴史的事件を喚起し、亡命という境遇に結びつけられることが多いが、彼の小説は、共産主義への批判や亡命者の告白には還元され得ない。とはいえクンデラは、小説作品において確かに、全体主義社会の現実を克明に伝え、フランスへの移住後は西欧社会と共産圏を比較し、さらに、冷戦構造崩壊後の亡命者の運命をも語っている。同時に、ほとんどの作品はラブ・ストーリーであり、愛と憎しみのドラマが物語展開を支えている。本稿では、「秘密」という要素に焦点を当てながら、クンデラの小説世界を条件づけるこの二つの側面を連結することを目指す。

はじめの二章では、抑圧的な体制と、それに抵抗する個人との関係に対し、クンデラが投げかける眼差しを検討する。とくに第一章で指摘するのは、彼が、対立するはずの体制と個人との間にアナロジーの関係を見出すことである。クンデラの小説では、国家レベルの抑圧システムが、実は、人間の本質的な欲求の反映であることが繰り返し例証される。第二章では、体制による抑圧・迫害の機制として、また同時に、家族などの身近な人間関係においても行われる私生活の侵害と羞恥心への攻撃に注目する。こうしてはじめの二章では、社会や家庭において「秘密」への権利を奪われる登場人物たちの姿を描き出す。そして第三章では、奪われるほどに強く「秘密」を求める人々の心の動きを分析する。とくに、クンデラが描くラブ・ストーリーにおいて、「秘密」こそが幸福追求の鍵であることを示したい。

## I. 政体と個人

『笑いと忘却の書』の第一部、「失われた手紙」の物語は、ソ連によるチェコ侵攻から三年後、1971年のプラハにおいて展開する。「プラハの春」の時代に公然と共産党批判を行っていた主人公ミレックは、1968年以降は科学者としての職を追われ建設現場で働いているが、それでも「正常化」への抵抗運動を続けている。とくに、ソ連による軍事介入当時の記録や、抵抗運動を組織するための議事録、状況を分析しながら付けている日記などを入念に保存している。ミレックは、そういった書類が秘密警察により発見された場合の危険を承知しながらも、「権力に対する人間の闘いは、忘却に対する記憶の闘いである<sup>1</sup>」という信念に衝き動かされているのである。ところで、作品の主張として、あるいは作者クンデラの言葉としてしばしば引用されるこの一文は、はたして本当に作品から読み取るべきメッセージなのだろうか。

権力への抵抗のために事実を記録しようとするミレックは、同時に、かつて恋人であったズデナに書き送った手紙をすべて取り戻し、処分したいと切望している。1945年に、ロシア軍がナチス・ドイツによる占領からチェコを解放したとき、人々はロシアに熱狂し、1948年には共産党政権が誕生するに至る。当時ミレックは、富農の父に反抗し、知識人を批判し、共産党の集会に熱心に参加していた。そして党の同志である醜い女性ズデナを愛していた。ミレックは、彼の青春時代を物語る唯一の記録であるズデナに宛てた手紙を処分すれば、小説家が小説を書き直すように、二十五年前の過去を部分的に削除して、自分の運命をより完璧で美しいものにできると考える。ある日、建設現場での作業中に左腕を骨折し、休養を余儀なくされたミレックは、それを機にズデナと会って手紙を取り戻そうとする。しかし、ズデナと会うべく奔走している間に秘密警察の手により自宅の家宅捜索が行われ、権力への抵抗のために保存していた書類が押収されてしまう。そしてミレックは禁固六年の刑に処されることとなる。

共産党政権にとって、「プラハの春」やロシアの侵攻という事件は、「美しい歴史に付けられた汚れ<sup>2</sup>」である。よって権力はこれらの事実を歴史から抹消する。そしてミレックは、忘却に対して抵抗すると宣言しながら、実際には、自分が闘っている対象であるはずの権力とまったく同じように、過去を

---

<sup>1</sup> Kundera, *Le Livre du rire et de l'oubli*, traduit du tchèque par François Kérel, Gallimard, 1985, p. 14. チェコ語オリジナル原稿に基づくフランス語訳が1979年に、そして作者自身の修正を経たフランス語版が1985年に刊行された。

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 31.

歪め、改竄すべく専心していることになる。

ミレックは歴史を書き変える。共産党が、そのほかのあらゆる政党が、あらゆる民族が、そして、人類が歴史を書き変えるように<sup>3</sup>。

自ら批判し、敵対しているはずの対象を模倣してしまうという逆説的な状況は、『存在の耐えられない軽さ』においても描かれている。1968年のソ連侵攻の後、プラハを去った画家のサビナは、亡命先のジュネーヴにてチェコ人たちの集会に参加する。彼女は、ロシアに対する武装蜂起を叫びながら、決してチェコに戻ろうとしない同国人たちに共感できず、反発を感じてしまう。そんなサビナを咎めるように白髪の老人が問いただす。「あなたは共産主義体制に抵抗するために、祖国ではいったい何をしていたのですか<sup>4</sup>。」するとサビナは次のように考える。

「…」ただひとつのことにしか彼〔白髪の老人〕は興味を持っていなかった。共産主義体制に反対する彼らの態度が積極的なものであったか、消極的なものであったか。はじめから反対していたか、あとになってからか。本気だったか、形式だけだったか。それを知ることである<sup>5</sup>。

この老人は同国人を評価する基準として、その人物が「いかにして共産主義に抵抗していたか」という一点しか考慮に入れようとしなない。サビナにとって老人の態度は、次の引用箇所ですべられるような、チェコを支配する共産主義的な振る舞いを受け継ぐものにほかならない。

共産主義国では、市民の監視と管理が社会における基礎的で恒常的な活動となる。ある画家が展覧会を行う許可を求めるとき、ある市民が海辺で休暇を過ごすためのビザを申請するとき、あるサッカー選手がナショナルチームに加わるとき、まず、彼らに関するすべての報告書と証明書を集める必要がある（管理人、職場の同僚、警察、党の細胞、企業運営委員会から）。次にこれらの証明書は、とくにこの仕事のために配備された官吏によって集計され、仔細に検討され、要約される。「…」そこではひとつのことしか問題にされない。「市民の政治的プロフィール」と呼ばれるものである（その市民の発言、考え、行動の

---

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 43.

<sup>4</sup> Kundera, *L'Insoutenable Légèreté de l'être*, traduit du tchèque par François Kérel, Gallimard, 1987, p. 141. チェコ語オリジナル原稿に基づくフランス語訳が1984年に、そして作者自身の修正を経たフランス語版が1987年に刊行された。

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 142.

しかた、集会やメーデーの行列に参加するかどうか)<sup>6</sup>。

共産主義国では、個人の言動や考えはすべて「政治的プロフィール」に集約され、それを基にその人物の運命が決定される。そのような体制を批判しているはずの亡命チェコ人たちは、依然として共産主義社会の思考パターンから逃れられず、人間の価値を、共産主義に抵抗する上での有用性に還元してしまう。

共産主義という文脈からは離れるが、クンデラは『不滅』において、敵対する相手と同化してしまう現象を取り上げ、主人公アニエスの視点から考察を深めている。

パリの街路を歩く中年女性アニエスは、周囲の人々への敵意を募らせる。まず、歩道にひしめく通行人たちは決して彼女に道を譲ろうとしない。たとえ相手が七歳の子供であっても、道を譲るのは決まってアニエスのほうである。また、商店や美容院、レストランなどから溢れる雑多な音楽が交通の喧噪と混ざり合い、アニエスが思わず耳を塞ぐと、すれ違う男がそれを見ながら自分の額に触れ、「気でも狂ったか」という仕草をする。彼女を愚弄するこの男や、オートバイの消音機を外して騒音を立てている女に対しアニエスは殺意を覚えるが、そのとき彼女の脳裏に亡き父親の記憶がよみがえる。

アニエスがまだ十歳くらいのとき、両親とともに山へ出かけ散策をしていた。ある山道で、地元の少年が二人現れ、道に立ちはだかつて言う。「ここは私道です。有料道路です<sup>7</sup>。」少年たちの悪ふざけなど相手にせずにそのまま通過するか、一フランでも渡せばすんだことであるが、父親はあっさり引き返すことを選ぶ。

パリの歩道を歩きながら周囲の人々に憎しみを募らせるアニエスは、少年たちを前に引き下がったこの父親の姿に思いを馳せる。彼女は想像する。もし、沈みかけた船に父親が乗っていて、救命ボートに乗員全員は乗れないとしたら、彼は生存競争からあっさり身を引いて溺れることを選ぶだろう、と。

[...] 船が沈みかけていて、救命ボートに乗るために競い合う必要があるとしたら、父親は死を選ばざるを得ないだろう。

そう、それは確実だ。アニエスは自問する。父親は船の乗員たちを憎んだのだろうか。たった今アニエスが、オートバイの女や、耳を塞いだ彼女を嘲笑した

---

<sup>6</sup> *Ibid.*, pp. 141-142.

<sup>7</sup> Kundera, *L'Immortalité*, traduit du tchèque par Eva Bloch, Gallimard, 1990, p. 41. このフランス語版は作者自身の修正を経て刊行された。

男を憎んだように。いや、彼女には、父親が人を憎むことができたとは考えられない。憎しみの罠、それは、憎しみによってわれわれと敵とがあまりに固く絡み合ってしまうことである。これが戦争の猥褻さである。互いに流し合う血の親密さ、目と目を見つめ合い、相互に身体を貫き合う二人の戦士の官能的な接近<sup>8</sup>。

敵を憎めば憎むほど、人はより強い絆でその敵に結びつけられ、同化してしまう。この「憎しみの罠」に陥りたくないアニェスの父親は、生存のために闘うよりも溺死することを選択するだろう。ここまで考察を進めたアニェスは、一瞬前に彼女を充たしていた憎悪から解放され、そして確信する。「[…]私には彼らを憎むことはできない。私を彼らに結びつけるものなど何もないのだから。私たちが共有するものなど何もない<sup>9</sup>。」

共産主義体制に抵抗する者たちが体制の模倣をしてしまい、似たような性質を帯びるとすれば、体制による攻撃の前に、闘わずして屈服するしかないのだろうか。クンデラはエッセー集『カーテン』において、硬直した全体主義体制に対し自ら硬直した態度で応戦するのではなく、監視や盗聴、密告地獄を柔軟に切り抜ける方法を体験談として示している。秘密警察の手により住居に多数の盗聴器を仕掛けられたクンデラとその友人は、秘密警察を煙に巻くための方法を考えつく。

私はある友人とアパートを交換し、名前も交換し合った。大変な女好きで、盗聴器にはまるで無関心であったこの友人は、私の部屋で彼の最も偉大な武勲のいくつかを成し遂げた。どんなラブ・ストーリーでも別れは最もつらい瞬間なので、彼にとって私の亡命はちょうどいい機会であった。ある日、お嬢さんや奥さんたちは、アパートが閉まっていて、私の名前もなくなっているのに気づいた。その頃私はバリから、一度も会ったことのない七人の女性たちに別れの葉書を書き、自分の署名をして送っているところであった<sup>10</sup>。

この体験談が物語るように、クンデラは共産主義体制に真っ向から立ち向かうという姿勢を取っていたわけではない。また、彼の小説の登場人物のうち、「失われた手紙」のミレックのように、体制への抵抗運動を行う者は少数派である。クンデラの主人公たちの多くは、スターリン体制にも、抵抗運動にも積極的に与することなく、状況を観察する視点として小説世界に存在する。

---

<sup>8</sup> *Ibid.*, p. 44.

<sup>9</sup> *Ibid.*, p. 45.

<sup>10</sup> Kundera, *Le Rideau*, Gallimard, 2005, p. 70.

クンデラが小説を書くのは、共産主義体制への態度を表明するためではなく、政体を含めた現実世界を把握し、社会の普遍的な原理と、人間存在の本質を探求するためである。

以上に指摘したように、クンデラは、敵対する対象と親密になり、模倣してしまうという「憎しみの罠」に意識的である。彼がこの現象を取り上げる時、それは単に、抑圧的な体制と対抗勢力との間に相互性や類似性を見出すためではない。クンデラが浮き彫りにするのは、国家レベルの抑圧システムとは、人間の潜在的で根源的な欲求を汲み取り、反映させたものにほかならないという事実である。彼がこの視点を持つに至ったエピソードが、『小説の技法』収録のカフカ論「その後ろのどこかに」で紹介されている。

1951年のプラハにて、クンデラの旧知の女性が無実の罪に咎められ、逮捕されたことがあった。この「スターリン裁判」の時代には、同様に逮捕された共産党員たちは数百人に上った。熱心な党員である彼らは、無実であるにもかかわらず、ひとたび党により糾弾されると、『審判』のヨーゼフ・Kのように自分の人生を入念に振り返り、隠された過失を見つけ出し、ありもしない罪を自供した。そして処刑された。クンデラの女友達は罪の自供を勇敢に拒絶し、死刑を回避して終身刑となった。そして十五年後、名誉を回復され釈放されると、ひとり息子と幸せに暮らし始めた。逮捕のとき一歳であった彼女の息子は十六歳になっていた。

その十年後、クンデラが二人を訪ねると、すでに二十六歳である息子に対し、母親は泣きながら不平を漏らしていた。その理由は、息子の朝寝坊という些細なものであった。クンデラは彼女をたしなめるように言う。「どうしてそんな些細なことに腹を立てるんだい？ 泣くほどのことじゃないだろ？ 大げさだよ<sup>11</sup>。」すると息子は、母親を擁護しながらクンデラに反駁する。

いいえ、母は決して大げさではありません。母は勇敢で素晴らしい女性です。みんなが挫折したときも彼女は耐え抜いたのですから。母は私が誠実な人間になることを望んでいます。確かに、私の起きるのが遅すぎたのです。でも、母が私に非難しているのは、何かもっと本質的なことです。私の態度です。私の身勝手な態度<sup>12</sup>。

こうして、母親から非難された息子は自分の過失を探し出し、ありもしない罪を認めるのである。これはまさに、1951年に共産党が母親に強要し、彼女

---

<sup>11</sup> Kundera, *L'Art du roman*, Gallimard, 1986, p. 132.

<sup>12</sup> *Ibid.*

が拒絶したところの「架空の罪の告白」である。この「ミニ・スターリン裁判」を目の当たりにしたクンデラは、次のように考察する。

「…」大規模な歴史的イベント——見かけは常軌を逸して非人間的なイベント——の内側で機能している心理的メカニズムは、身近な状況——まったく平凡でごく人間的な状況——を支配する心理的メカニズムと同じものである<sup>13</sup>。

無実の人々を不当に糾弾し、架空の罪を告白させることはスターリン体制に固有の現象ではない。スターリン体制下でそれが可能であったのは、そのような振る舞いが生活の身近な場において日常的に行われているからである。言い換えると、人々の日常的な思考パターンや生活習慣に入り込んでいない事象を、体制が人工的に作り出し、一方的に実践を強いることはできないのである。このことの例証は『存在の耐えられない軽さ』において示される。

1968年の軍事介入の直後、ロシア人たちはチェコ人たちの一部を占領体制の側に引き入れ、恐怖政治の手先として利用する必要があった。しかし、チェコ人たちは共産主義もロシアもまるで支持していなかったため、人材を確保するのに苦心していた。そこでロシア人たちは、チェコ国民の一部に攻撃性を植え付け、育むために、まず、仮の標的として動物を選んだ。メディアを通して動物たちの有害性が叫ばれ、鳩や犬の駆除が唱えられた。

人々はまだ、占領の大惨劇のせいで精神的に傷ついていた。しかし、新聞やラジオ、テレビでは、歩道や公園を汚す犬たちのことばかりが問題にされていた。犬たちはこうして子供たちの健康を脅かし、何の役にも立たないわりに餌ばかり食べるというのである<sup>14</sup>。

この動物駆除キャンペーンから一年後、動物たちに対して鬱積した怨恨は、真の標的である人間へと向けられる。チェコ人同士が憎しみ合い、告発し合う密告地獄がこうして誕生する。動物への迫害が日常的な行為として定着してはじめて、権力は人々の攻撃性を利用し、人間による人間の迫害へと導くことができる。

---

<sup>13</sup> *Ibid.*

<sup>14</sup> *L'Insoutenable Légèreté de l'être*, p. 420.

## II. 「秘密」への権利

政体による抑圧を、人間の本質的な欲求を反映させたものと捉えるクンデラは、国家レベルでの出来事と個人の振る舞いとの間にアナロジーの関係を指摘する。そういった例として、クンデラが小説において繰り返し取り上げるのは、全体主義体制によって、また個人によって加えられる羞恥心への攻撃である。

『存在の耐えられない軽さ』において、チェコ人の小説家ヤン・プロハースカの私的な会話が秘密警察により盗聴・録音され、ラジオ放送されたというエピソードが紹介される。プロハースカは「プラハの春」時代に共産党批判を行い、人々の支持を得ていた。1968年の軍事介入後、占領体制は、依然として人気を博しているプロハースカの名声を失墜させるため、彼が友人の大学教授らと交わした会話を連続番組としてラジオ放送することにした。公の場と違い、私的な会話においては、大げさな言葉使いや常軌を逸した表現、友人の悪口などが入るのは当然である。しかし、放送を聞いた人々はプロハースカの言動に憤り、秘密警察の狙いどおり彼の名声は失墜する。

主人公テレザはこの事態について、次のように考察する。

ワインを飲みながらの友人同士の会話が公にラジオ放送されるなら、それはあるひとつのことしか意味していない。世界が強制収容所になってしまったということである<sup>15</sup>。

残酷さや暴力は、強制収容所を規定する本質的な要素にはなり得ない。人と人とが常に隣り合わせで生きること、すなわち、私的領域の消失こそが強制収容所の特徴となる。プロハースカ同様、テレザは自分もまた、田舎で母親と住んでいた頃は強制収容所にいたようなものであったと考える。

プラハにてトマーシュと暮らすようになる前、テレザはチェコの片田舎で、母親と、テレザにとって義父となる、母親の再婚相手とともに暮らしていた。そこでは羞恥という概念は完全に否定されていた。母親は家の中を下着姿で歩き回り、夏には裸でいても平気であった。義理の父親は、あえてテレザの入浴中を狙って浴室に入って来た。とくに母親は、テレザを身ごもったことが自分の不幸の元凶であると考えていたため、羞恥心というものを否定することにより、テレザに罰を与えていたのである。

---

<sup>15</sup> *Ibid.*, p. 197.



母親は自分の正当性を主張し、罪人が罰せられることを望んだ。彼女は、娘が自分とともに、恥じらいのない世界にとどまることを要求した。そこでは、若さや美しさは何の意味も持たない。その世界は巨大な強制収容所そのもので、互いに似通い、魂が消えてしまった身体の空間なのである<sup>16</sup>。

母親は、自分が失ってしまった若さや美しさをテレザが持っていることに憤慨し、そういった価値を否定するために、ある身体とほかの身体とがまったく区別されない世界、強制収容所にいるかのように振る舞った。テレザは鍵を掛けて入浴することを許されず、また、屋根裏に隠していた日記は母親によって探し出され、昼食の最中に大声で読み上げられた。

テレザは、プロハースカの会話がラジオで放送されたことと、彼女が母親から受けた仕打ちとを重ね合わせ、考察する。

テレザは母親と暮らしていた頃、強制収容所に生きていたのだった。それ以来、強制収容所とは決して、人を驚かせるような特別なものではないことを知っていた。それは、もとから与えられた、基本的なものである。われわれがこの世に現れるときにはすでにそこにあり、全身全霊の力を極限まで緊張させることによってしか逃れられないものなのである<sup>17</sup>。

友人との会話が秘密警察により盗聴され、私的領域が消滅するなら、そのとき世界全体が強制収容所と化すことになる。テレザの家庭内でも起こっていたこの事態は決して特別なものではなく、それは、人間に与えられた避けられない条件なのである。

すでに触れたカフカ論「その後ろのどこかに」においてクンデラは、全体主義社会と家庭とのアナロジーについて次のように述べている。

「…」ますます不透明になる権力は、市民の生活がこの上なく透明であることを要求する。この「秘密のない生活」という理想は、模範的な家族の理想と一致する。ある市民は、党や国家に対して、どんなことであろうと隠す権利はない。同様に、子供は両親に対して何かを秘密にする権利を持たないのである<sup>18</sup>。

全体主義体制は隠しごとのない家庭のあり方を理想とし、国家全体が「ひとつの大きな家族」となることをプロパガンダとして掲げる。確かに、テレザの母親ほど極端ではないにしても、わが子の生活を管理し、秘密を持たせま

---

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 74.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 197.

<sup>18</sup> *L'Art du roman*, p. 133.

いとする親の心情は普遍的なものである。

『生は彼方に』の物語は、秘密の領域を持つことにより自立したいと願う子供と、わが子との関係を透明に保とうとする母親との葛藤を描いている。とりわけその葛藤は、猿股のエピソードにより象徴的に示される。

第二次大戦後のチェコでは、服装の優美さを追求することは政治的な犯罪であり、人々は醜い身なりをしていた。とくに下着については、「膝まで垂れ下がり、腹のところがおかしい開口部で飾られたゆるい猿股<sup>19</sup>」が売られているのみであった。この猿股が気に入らなければ、スポーツ用の半ズボンで代用することとなった。主人公の大学生ヤロミルは、恋人と会う日のみスポーツ用の半ズボンを履くようにしたが、彼の下着を熱心に管理する母親の目をごまかすために大変な苦勞をしていた。

彼女〔母親〕は、彼〔ヤロミル〕の下着用の引出しに何枚の猿股があるかを正確に知っていた。洋服だんすをひと目見るだけで、その日ヤロミルがどれを履いているのかわかった。引出しの猿股がひとつもなくなっていないことに気づくと、彼女はすぐに怒り出した。彼女はヤロミルがスポーツ用の半ズボンを履くのを望まなかった。彼女にとってスポーツ用の半ズボンは猿股ではなく、体育館でしか用いられないはずだった<sup>20</sup>。

ヤロミルは、恋人と会う日には必ず猿股をひとつ引出しから抜き出し、勉強机に隠しておいた。こうして、実際にはスポーツ用の半ズボンを履いていることを母親に見破られないようにした。

ある日ヤロミルは、恋人とは別の美しい映画監督と出会う。彼女はヤロミルに気があるらしく、部屋で二人きりになろうとするが、彼は泣く泣くこの機会を断念する。醜い猿股を履いていたのだ。好機を逸したヤロミルの未練と後悔は猿股への怨恨に変わり、さらにその怨恨は母親へと向けられる。

それから彼〔ヤロミル〕は、彼が憎しみを感じている対象が猿股ではないことを理解した。その対象は母親であった。彼に下着を与えている母親、彼がスポーツ用の半ズボンを履き、机に猿股を隠すために、その目をごまかさなくてはならない母親、彼の靴下やシャツのひとつひとつまで知り尽くしている母親

---

<sup>19</sup> Kundera, *La Vie est ailleurs*, traduit du tchèque par François Kérel, Gallimard, 1987, p. 358. チェコ語オリジナル原稿に基づくフランス語訳が 1973 年に、そして作者自身の修正を経たフランス語版が 1985 年と 1987 年（決定版）に刊行された。

<sup>20</sup> *Ibid.*

に対し、憎しみを感じていたのである<sup>21</sup>。

醜い下着の強要という辱めにより体制が羞恥心に加える攻撃は、末端における母親の協力を得てその威力を尖鋭化させる。国家と家庭との関係はもはやアナロジーにとどまらない。全体主義の抑圧システムを利用することにより、子供を管理したいという自分の欲求を満たす母親は、抑圧システム自体に組み込まれているのだから。

クンデラの登場人物たちのうち、羞恥心への攻撃に対し最も激しく抵抗し、私的領域を守るための死闘を繰り広げるのは、『笑いと忘却の書』第四部、「失われた手紙<sup>22</sup>」の主人公タミナである。この作品は、共産党による迫害と、その帰結としての亡命を扱っているものの、実質的には政治的な議論や考察はあまりなされない。それは、家族や親類によって秘密を踏みにじられ、個人としての尊厳を傷つけられる未亡人タミナの物語である。

タミナは西ヨーロッパの地方都市で給仕として働き、孤独で貧しい生活を送っている。彼女はプラハで夫とともに暮らしていたのだが、1968年のソ連侵攻の後、夫が職場を追われ、友人たちからも冷遇されるようになると、二人で西欧へと亡命する。そして亡命後に夫は病死してしまう。孤独なタミナにとって、プラハで夫と過ごした十一年間の思い出が唯一の心の支えであるが、日に日に記憶が薄れてゆく。そこでタミナは、プラハに残してきた十一冊の日記帳を取り戻そうと尽力することになる。

それほど重要な日記帳を、タミナはなぜ手放したのだろうか。亡命を決意した彼女と夫とは、ユーゴスラヴィアの海岸への団体旅行に参加し、目的地に着くなりグループを離れ、不法にオーストリア国境を越えて西へと向かった。団体旅行への参加を装っていたため、持ち出せる荷物はそれぞれスーツケースひとつが限界であった。また、たった二週間の旅行だというのに、手紙や日記帳といった私生活の記録を所持していることが税関で見つかれば疑われるだろうと思い、持ち出すことを断念した。そして二人は、それらを夫の母親の家に預けることにした。

西欧に暮らすタミナにとって、義母に頼んで日記帳を郵送してもらうこともまた不可能であった。チェコでは、外国との通信は秘密警察によって管理

---

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 362.

<sup>22</sup> 『笑いと忘却の書』を構成する七部は、それぞれ独立した短篇小说として読むこともできる。七部のうち二部（第一部と第四部）に「失われた手紙」という同一のタイトルが付されている。

されており、タミナは「警察の役人が彼女の私生活に鼻を突っ込む<sup>23</sup>」ことを受け入れられなかった。彼女は郵送を諦め、プラハに旅行するという知人に、手紙と日記帳を持ち帰るよう依頼する。

こうして、タミナが祖国を追われ、不幸な暮らしを余儀なくされ、大切な思い出までも失いつつあるのは、抑圧的な体制ゆえであるように思われる。しかし彼女に対して、体制による迫害にもまして大きな打撃を与えるのは、義母や父親、兄といった家族や親戚による羞恥心への攻撃である。

タミナは亡命前に、夫とともに手紙と日記帳を嚴重に包装し、義母の家の引出しに入れて鍵を掛けた。彼女は、私生活の記録を誰かに読まれることをひどく恐れている。タミナは夫との思い出が他人の視線によって汚される前に、できるだけ早く手紙と日記帳を取り戻そうと、彼女に好意を持つジャーナリスト、ユゴーの誘いに乗り、身を任せる。ユゴーはタミナのためにプラハへ行くことを請け合っていたのである。こうして彼女は、大切な思い出を他人の視線から——とりわけ義母や父親の視線から——守るために、自分の体が汚されることを選ぶ。

七歳のとき、寝室で裸になっているところを叔父に見られたタミナは、極度の恥ずかしさから、二度とこの叔父と目を合わせることはなかった。彼女は、夫との思い出の記録が父親と兄によって読まれたことを確信すると、二度と彼らと会わないことを心に誓う。最終的に手紙と日記帳を取り戻す望みが絶たれると、身体を陵辱され、秘密の領域を踏みこまれたタミナはすべての希望を失ってしまう。

クンデラは政体と個人との間にアナロジーの関係を見出し、とくに、国家レベルと同様、家庭においてなされる私生活の侵犯を取り上げている。ところで、私生活の侵犯という現象は共産圏に固有のものではない。クンデラは『裏切られた遺言』において、私生活の侵害は西欧世界でも行われていると指摘する。彼は亡命先のフランスにて、「すでに進行した癌の治療を受けている病院の前で、カメラマンたちに囲まれ、顔を隠している歌手のジャック・ブレルの大きな写真<sup>24</sup>」が雑誌の一面を飾っているのを目にすると、盗聴器だらけのチェコと同じことが起きていると感じる。

フランスを舞台とする『不滅』には、世界規模で進行する私生活の消滅や羞恥心の喪失が描かれ、東西冷戦構造の崩壊後に現代社会が向かいつつある状況を予告している。

---

<sup>23</sup> *Le Livre du rire et de l'oubli*, p. 147.

<sup>24</sup> Kundera, *Les Testaments trahis*, Gallimard, 1993, p. 310.

主人公アニェスがラジオを聴いていると、麻酔医の過失により外科手術中に患者が死亡したという事件が報道される。結果として三人の医師が起訴され、また、消費者団体により、すべての手術の録画と、フィルムの保管を義務づける提案がなされたという。人々が賛同しているらしいこの提案に対し、アニェスは嫌悪感を覚える。

毎日、数多くの眼差しが私たちに突き刺さる。それでもまだ足りずに、制度上の眼差しを導入し、その眼差しが一秒たりとも私たちを離れず、病院でも、道端でも、手術台の上でも、森でも、ベッドの奥までも私たちを監視することになるだろう<sup>25</sup> [...]。

私生活の侵害への人々の無頓着や、羞恥心を自ら放棄するという態度に対しアニェスが覚える嫌悪感は、夫のポールからも、ほかの誰からも理解されることはない。

\*  
\*\*

クンデラは、政体と個人との間に共犯関係を見出し、それが、とりわけ羞恥心への攻撃という点で成立していることを指摘する。彼は、秘密のない「大きな家族」を理想とする全体主義社会を経験し、フランスへの移住後は亡命者ならではの感性で現代社会を捉え、「近代のキー概念のひとつ<sup>26</sup>」である羞恥の喪失を観察している。ところで、私生活の侵害を身をもって経験し、現代社会における羞恥の消滅を認識すればこそ、クンデラはあえてこれらの価値に拘泥し、いくつかの小説では作品の意味づけを決定する鍵として「秘密」を用いている。次章では、クンデラが描くラブ・ストーリーにおいて「秘密」がいかに機能するかを探り、人間存在の本質へと向けられる彼の眼差しを浮かび上がらせたい。

### III. 引き裂かれた恋人たち

クンデラの小説の登場人物たちは、秘密を持つ権利を奪われるほどに、より強くその権利を欲し、それは幸福の追求と連動している。本章ではまず、秘密を持ちたいと望む人物たちの心の動きを分析し、続いて、小説において描かれる恋愛劇を秘密という鍵によって読み解いていきたい。

---

<sup>25</sup> *L'Immortalité*, pp. 50-51.

<sup>26</sup> *Les Testaments trahis*, p. 308.

## 孤独から秘密へ

クンデラの小説には、社会での孤立や周囲からの無理解に苦しみ、コミュニケーションの不全に陥った個人が、自分だけの秘密の領域へ逃げ込むという構造が現れる。

『笑いと忘却の書』第四部、「失われた手紙」のタミナは、亡命先での疎外感ゆえに、他界した夫との思い出を自分だけの秘密として大切に持っていたいと望む。語り手は、タミナの孤立を次のように表現する。

世界はますます高くそびえ立ち、壁のようにタミナの周りを旋回するように思われる。そしてタミナは低い芝生である。その芝生には、亡き夫の思い出という一輪のバラが咲いているのみである<sup>27</sup>。

西ヨーロッパへの亡命後に、唯一の身寄りであった夫が病死すると、タミナは入水自殺を図るが失敗する。そして彼女はそれからの人生を、「静寂の中で、静寂のために生きる<sup>28</sup>」ことを決意する。夫との思い出だけが生き甲斐であるタミナが「低い芝生」にたとえられ、「旋回する壁」に取り囲まれているとすれば、この壁は、主に言葉の喧噪によって造られた壁である。「失われた手紙」は、プラハにある手紙と日記帳を取り戻そうとするタミナの物語をプロットとする一方、空虚な言葉が氾濫し、人々が自己主張するばかりで理解し合えないという、コミュニケーションの不全状態を描いている。静寂が支配する秘密の世界へとタミナを追いやる喧噪の壁は、さまざまなかたちで現れる。

まず、タミナが給仕として働くカフェの客たちは、自分の話をするばかりで人の話を聞こうとはしない。また、「失われた手紙」には、強い自己表現願望を持つ人々が登場する。カフェの常連客のビビは、作家になって「自分の人生を表現したい、完全に独創的な自分の感情を表現したい<sup>29</sup>」と言うが、家には一冊の本も持っていない。また、ある著名な作家は、自分の性生活についてテレビ番組で赤裸々に語り、さらにジャーナリストのユゴーは、タミナを迫害した権力を執筆活動により打倒すると主張し、タミナとの愛についても本を出版したいと言う。相互理解へと至ることのない、一方通行の言葉が氾濫し、やがてこの世の美しさを覆い尽くす。

---

<sup>27</sup> *Le Livre du rire et de l'oubli*, pp. 142-143.

<sup>28</sup> *Ibid.*, p. 164.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 153.

美しさは消えてしまった。喧噪の水面の下に。私たちが常に経験している、言葉の喧噪、自動車の喧噪、音楽の喧噪の水面の下に。美しさは、アトランティス大陸のように沈んでしまったのである<sup>30</sup>。

喧噪が美しさを排除する世界において、タミナは居場所を失い、友人を持つこともなく、亡き夫との秘密の世界へと追いやられてしまう。

フランス人である『不滅』のアニエスも、亡命者のタミナと同様、喧噪や世の中の醜悪さ、精神的な疎外感に苦しみ、人間関係を避けるように、他界した父親との秘密の世界——静寂の世界——を希求する。

アニエスは夫と娘とともにパリで暮らしている。スイスに住んでいた彼女の両親はすでに他界している。母親は六年前に、父親は五年前にそれぞれ病死した。アニエスにはパリに住む妹ローラがいるにもかかわらず、父親は遺産をアニエスのみに与えるという決断をした。彼は死を予感すると、預金の大部分を秘密裏にアニエスの口座に振り込み、残りを数学者の学会に寄付した。こうして、全額を寄付してしまったかのように装うことにより、周囲の不審の目をかわし、また、ローラを傷つけることなく、アニエスだけに遺産を与えたのである。彼女は口座に振り込まれた金額に気づくと、妹と分かち合おうと考えるが、思いとどまる。父親の遺志を裏切ることを恐れたからである。

この贈り物によって、彼はきっと彼女に何かを伝え、合図を送りたかったのである。それは、生前には時間がなくて与えられなかった忠告であり、彼女は二人だけの秘密として、ずっと大切にすべきものであった<sup>31</sup>。

アニエスは少しずつ、父親からの贈り物の意味を理解していく。彼は、アニエスが自由でいること、望みどおり静寂の中で生きることを願って秘密の贈り物をした。

アニエスは結婚後、家庭でも職場でも、常に気づまりな思いをしていた。自宅には彼女の専用の部屋がないため、ひとりきりになれる時間はほとんどない。朝、目を覚まして、夫のボールがすでに出かけていると彼女は安堵感を覚え、娘のブリジットとも顔を合わさずにすむよう、そそくさと家を出る。職場では、二人の同僚とともに八時間過ごさなくてはならない。車の中で幸

---

<sup>30</sup> *Ibid.*, p. 174.

<sup>31</sup> *L'Immortalité*, pp. 35-36.

せを感じるの、「そこでは誰も彼女に話しかけず、誰も彼女を見ていない<sup>32)</sup>」からである。

アニェスは、父親と過ごした思い出のある生まれ故郷スイスに強い郷愁を感じ、夫や娘と離れて、ひとり移り住みたいと考える。同時に、精神的に家族を裏切っていることに罪悪感を感じている。孤独を求めながらも家族を愛しているアニェスは葛藤に苦しむが、勤めている会社がスイスに子会社を創り、ドイツ語を話せる彼女に転勤を勧めたのを機に決断する。そして、この決断について家族を説得するための方法を思案しながら、父親の墓参りを兼ねてアルプスを旅行中、アニェスは自動車事故で命を落とす。

病院に収容されたアニェスは意識不明と診断されるが、周囲の出来事を理解し、死にかけていることを自覚する。彼女は、夫ポールがパリから駆けつけるより先に、死が訪れることを切望する。そしてポールが到着すると、アニェスはすでに死亡している。彼は妻の死に顔が、それまで決して見せたことのない表情を浮かべて微笑んでいるのを目にし、愕然とする。アニェスが、ポールには知り得ない、秘密の世界を持っていたことに気づいたからである。

彼〔ポール〕は、瞼を閉ざした顔を見た。ポールがそれまで見たことのないその奇妙な笑顔は、彼に向けられたものではなかった。その笑顔は、ポールの知らない誰かに向けられていた。それは、彼には理解不可能であった<sup>33)</sup>。

この笑顔は亡き父親に向けられたものである。アニェスは父親への愛情を胸の内に隠し持ち、生きる寄る辺としていた。孤独と静寂の世界へと誘う父親の声に導かれてきた彼女は、死に際しては、父親との秘密の交信を誰からも妨害されないよう、死へ至る道を全速力で走り抜ける。

「失われた手紙」のタミナと『不滅』のアニェスはともに、社会での疎外感や周囲の人々との精神的な齟齬ゆえに、自分だけの秘密の世界に逃げ場を求めている。二人にとって秘密の世界は、愛する存在との交流の場となっている。タミナとアニェスは、愛する人との秘密の交流を誰かに妨害されたり、汚されたりすることを極度に恐れているのである。

また、『冗談』の主人公ルドヴィークは、共産党から除名され、友人たちとの絆も断たれ、人類への憎悪を募らせるが、懲罰隊への服役中にルツィエと出会い、この女性との交流により絶望を克服する。

---

<sup>32)</sup> *Ibid.*, p. 50.

<sup>33)</sup> *Ibid.*, pp. 397-398.



共産党政権が誕生した 1948 年の二月事件の頃、プラハの大学生ルドヴィーク・ヤーンは党の学生同盟で重要な地位にあり、また、大学の後輩マルケータに思いを寄せていた。しかし、マルケータへの恋が思うように進展しないことから、ルドヴィークは、夏休み中に政治教育の合宿に参加している彼女を動揺させるため、共産主義を揶揄する内容の絵葉書を冗談半分に送る。この絵葉書を発端として、ルドヴィークは党から除名され、大学を強制的退校処分となる。絵葉書の文面が冗談であったと主張しても誰にも聞き入れられず、処分を決定する学部の総会では、彼の先生や親友も含め、約百人の出席者全員が彼の破滅に賛成するため手を挙げた。

共産党の敵とみなされ、オストラヴァ郊外の鉱山で兵役に服すこととなったルドヴィークは、頭を丸刈りにされ、外見の個性をはぎ取られ、私的領域のない雑居部屋での生活を強いられる。炭坑の重労働と監視の行き届いた兵舎暮らしのため絶望に沈んでいた彼は、ある外出日に出かけた映画館でルツィエと出会う。そのときの心境は次のように語られる。

その夜から、私のすべてが一変した。私の心はもはや空虚ではなかった。突然に私の胸の小部屋が片づけられ、そこに誰かが住み始めた<sup>34</sup>。

ルツィエとの交流によりルドヴィークは、生活のあらゆる瞬間が監視される兵舎の外に、自分だけの秘密の世界を持つことになる。たとえ所持品検査の憲兵が、ルツィエからの贈り物の花束を床に投げつけるとしても、二人の交流は管理の手の届かない領域において展開する。ルドヴィークは私生活を持つことにより、非個性化の抑圧に打ち勝ち、人類への呪詛から解放される。

『存在の耐えられない軽さ』のテレザは、チェコの片田舎で家族と暮らしていた頃、粗野で無作法な周囲の人々に耐えかね、本の世界へと逃避していた。そして、逃避の場である本の世界においてトマーシュと出会う。

仕事のためにテレザの住む町を訪れた外科医トマーシュは、プラハへの帰りの車を待つ間、彼女が給仕として働くレストランに立ち寄った。トマーシュとの出会いがテレザにとって決定的な意味を持ち得たのは、彼が読書をしていたからである。

[...] 彼のテーブルには一冊の本が開かれていた。この店では、テーブルの上

---

<sup>34</sup> Kundera, *La Plaisanterie*, traduit du tchèque par Marcel Aymonin, 1985, p. 113. 1967 年に刊行されたチェコ語版の最初のフランス語訳が 1968 年に、そしてクロード・クールトと作者自身の修正を経たフランス語版が 1980 年と 1985 年(決定版)に刊行された。

で本を開いた客はまだ誰もいなかった。テレザにとって、本は密かな友愛関係を示すしるしであった<sup>35</sup>。

テレザは町の図書館でたくさんの本を借りていた。フィールディングやトーマス・マンの小説は、彼女に想像力による逃避のきっかけを与えた。

トマーシュが開いていた本はテレザにとって、彼との「密かな友愛関係」を証明する「しるし」である。本の世界における秘密の交流を信じて、テレザは故郷を捨て、トマーシュのもとへと旅立つのである。

### 不在者への愛

クンデラの小説において、社会での孤立や人々の無理解に苦しむ主人公たちは、愛する存在との秘密の交流を生き甲斐としている。ところで、これらの主人公たちと愛する対象との関係に注目すると、クンデラが描く恋人同士は、空間の隔たり、第三者による妨害、あるいは死によって、引き裂かれた関係にあることが浮かび上がる。

まず、タミナの物語には、対象が死者であるゆえに一層深まる愛情が描かれている。夫の死後、彼女が恋人を作らないでいるのは、夫への忠誠心のためではない。タミナは、生きている夫であれば裏切ることができても、死者である夫を裏切るとは困難であるという奇妙な考えを持つ。

今となっては、自分を守ることができず、子供のように彼女の意のままになる者を痛めつけることになってしまう。死んでしまった彼女の夫を守ることができるのは、この世でたったひとり、彼女だけなのである<sup>36</sup>。

生前の、強くたくましかった夫と違い、亡き夫を守ることができるのはタミナだけである。弱い存在である死者への哀れみから、彼女の愛は夫の生前にもまして深まっている。

『不滅』のアニェスにとって、父親はすでに故人であるばかりか、生前も、二人の間には直接的な交流はそれほど多くなかった。母親の死の数年前、父親が重い病気に罹っているとわかると、アニェスは二週間の休暇を取り、彼と二人きりで過ごそうとした。しかし、母親が常に二人から離れようとせず、望みを叶えることはできなかった。母親の死から一年後、父親の病状が急変するとアニェスは彼に会いに行き、亡くなるまでの三日間をともに過ごした。

---

<sup>35</sup> *L'Insoutenable Légèreté de l'être*, p. 75.

<sup>36</sup> *Le Livre du rire et de l'oubli*, p. 150.

これを除けば、彼らが頻繁に二人きりになる機会を得たのは、アニエスが八歳から十二歳のときだけであった。母親が幼いローラの面倒を見ていたからである。アニエスにとって父親は、心からの愛情を持ち得た唯一の存在であるが、二人きりで過ごした時間はあまり長くない。父親との会話のうち彼女の記憶に残っているのは「割れた皿の破片のような断片<sup>37)</sup>」だけである。

二人の交流は、会話による相互理解ではなく、父親が発するいくつかの暗号をアニエスが解読するという手続きにより保証される。最も重要な暗号はゲーテの詩である。アニエスが小学生の頃、ドイツ出身である父親は、昔から親しんできたゲーテの詩を繰り返し彼女に朗誦して聞かせた。そして、死の床にある父親が最後にこの詩を朗誦すると、それが死について語ったものであることをアニエスは初めて理解する。同時に、彼が死を予感していることを知る（「待って もう少しだけ / きみも休むことになるから<sup>38)</sup>」）。父親からの遺産という暗号もまた、このゲーテの詩と照らし合わせるにより解説可能となる。この詩が、木の梢でまどろむ鳥たちの沈黙を伝えていることから、父親の遺産は、静寂の中で暮らす自由をアニエスに与えるためのものと考えられる。

父親は、アニエスに暗号を残した以外は、一切何も残さずに死んでいった。私生活が他人の目に触れることを恐れた彼は、死に先立って所持品をすべて自分の手で処分してしまう（「押入れの中の服も、原稿も、講義ノートも、一通の手紙も残さなかった<sup>39)</sup>」）。写真の一枚たりとも残すまいとする父親の態度に、アニエスの妹ローラは憤慨する。ローラは、死者の手紙や写真はもはや死者自身のものではなく、生者に属すると考えているのである。アニエスは父親を擁護し、妹とは精神的に決別する。

アニエスと父親との親子愛は、二人きりで過ごす時間や、交わされる言葉によって育まれるものではない。彼らにとっての愛とは、私生活を守りたいという相手の意志を尊重することであり、それは、二人の精神的な交流を秘密にするための工夫（暗号の発信と解説）によって支えられている。

『冗談』のルドヴィークとルツィエもまた、二人を隔てる障壁により引き裂かれた関係にある。兵舎の柵によって隔てられた恋人同士は、ルドヴィークが外出を許可される稀な機会にしか会うことができない。軍隊の管理体制が強化され、兵士たちの外出が禁じられると、ルツィエは柵のところまでル

---

<sup>37)</sup> *L'Immortalité*, p. 34.

<sup>38)</sup> *Ibid.*, p. 47.

<sup>39)</sup> *Ibid.*, p. 369.

ドヴィークに会いに行き、二人は柵の金網越しに口づけを交わす。ルツィエはほとんど毎日やって来ては花束を渡し、ルドヴィークは彼女に手紙を書く。恋人同士を引き裂く装置こそが二人の愛を掻き立てるかのように。

[…] これが、われわれの愛が最も強度を増した期間であった。監視塔の探照灯や、夕方頃に聞こえる番犬たちの短い吠え声、そして、すべてを統括する若造の伍長は、私の思考において貶められた地位にあった。私の思考は完全に、ルツィエが来るということに占められていた<sup>40</sup>。

ところが、柵を隔てた恋人同士の交流は約半年で幕を閉じる。ルドヴィークは、肉体関係を含めルツィエのすべてを愛したいと望んだのに対し、ルツィエは精神的な愛だけを求めている。この認識の違いゆえに、彼らは互いに傷つけ合い、生き別れとなる。ルツィエはオストラヴァを去り、ルドヴィークは除隊後も彼女を探すことはなかった。

小説においてこの恋愛は、さらに大きな物語の枠組みの中に位置づけられる。『冗談』の第一章では、ルドヴィークが南モラヴィアのスロヴァーツコに帰郷し、そこで思いもかけず、かつての恋人ルツィエと十五年ぶりで再会する場面が描かれる。ルツィエとの再会を契機にルドヴィークは過去を回想し、第三章において、すでに触れたオストラヴァでの二人の恋愛を語る。さらに、スロヴァーツコに住むルドヴィークの旧友コストカは、ルドヴィークにとっては意外なことに、ルツィエを彼以上によく知っていて、第六章で次のように彼女の過去を語る。

1948年の二月事件後の混乱期に、コストカはプラハの大学を去り、西部ボヘミアの国営農場に技術労働者として勤め始めた。1951年、オストラヴァを去ったルツィエは、生まれ故郷ヘブに帰ることを拒み、この西部ボヘミアの農場へ逃げ込んだ。そしてコストカのもとで働くこととなった。やがてコストカに心を開いたルツィエは、オストラヴァで墓の花を盗んで逮捕されたことや、若い兵士に強姦されそうになったことを打ち明けた。さらには、十六歳の頃、故郷ヘブにて、少年たちの集団に何度も強姦され、素行不良の嫌で一年間感化院で過ごしたことを語った。1956年にコストカは農場を去り、スロヴァーツコの病院に職を得た。その数年後にルツィエは結婚し、夫とともに農場からコストカのいるスロヴァーツコへと移り住んだ。そして理容師として働き始めた。

---

<sup>40</sup> *La Plaisanterie*, p. 163.

第六章でコストカは、オストラヴァの若い兵士がルドヴィークのことであるとは知らずに、ルツィエから聞いた話を彼に伝える。そして第七章でルドヴィークは、コストカが語ったルツィエの過去を考慮に入れながら、彼女との愛について思いを巡らす。彼は、たとえルツィエがコストカに、オストラヴァの兵士を愛していなかったと言ったとしても、彼女が真実を語った保証はないと考える。

「…」確かに、彼「コストカ」はルツィエと知り合いで、彼女についていろいろなことを知っているようだった。でも、本質的なことは知らなかった。鉱夫の家に借りた部屋で彼女をものにしようとした兵隊のことを、ルツィエは本当に愛していたのだ。彼女が花を盗んでいたのは私のためであったと知りながら、彼女が敬虔さへの漠然とした好みから花を盗んでいたという話を、私はあやうく本気にするところだった。それに、彼女がコストカにこのことをまったく話さず、私たちの六ヶ月間の恋愛についても黙っているなら、それは彼女が、彼でも手の届かない秘密を守ったことになり、つまり、彼も彼女を知らなかったのだ<sup>41</sup>。

ルツィエは、墓から盗んだ花をルドヴィークに届けていたことをコストカに隠した。同様に、兵士を愛していなかったと言ったのは、二人の交流を秘密にするためであったと考えられる。ルドヴィークは、ルツィエが二人の関係を語らず、秘密の領域にしまい込んだこと自体に、自分に対する彼女の愛の証しを読み取ろうとする。

しかし、ルツィエは、ルドヴィークの視点から、あるいはコストカの視点から語られる物語に登場してはいるものの、彼女自身に語りの視点に移ることはないため、ルドヴィークへの愛がいかなるものであったのか、真相は明かされないままである。そしてルドヴィーク自身、真相を解明することには重要性を認めていない。というのも、ルツィエが彼にとって生涯で最も愛した女性であり得るのは、彼女が過去の存在となり、伝説や神話の領域に属するからなのである。

彼女は静かな郷愁のように、昼も夜も私に住みついていて、人が永遠に失ったものを欲するように、私は彼女を欲していた。

そしてルツィエが私にとって完全なる過去——過去としては永遠に生き、現在としては死んでいる——となったゆえに、彼女は、肉体的で、物質的で、具現的な外観を少しづつ失い、ますます解体されて、伝説となり、また、羊皮紙

---

<sup>41</sup> *Ibid.*, p. 385.

に記された神話となり、私の人生の奥深くにある金属の小箱に隠された<sup>42</sup>。

十五年前、半年間の二人の交流は兵舎の柵によって隔てられていた。そして、現在までルドヴィークがルツィエを愛し続けているのは、彼女を、具現的で肉感的な実体を持たない「逃亡の女神<sup>43</sup>」とみなしているからである。よってルドヴィークは、十五年ぶりで再会したルツィエと新たな交流を持とうとは考えない。不在者としてのルツィエを愛するルドヴィークは、過去を掘り返すことを望まず、二人の愛について他人に語らないばかりか、自分たち同士でも語り合うことはない。

『存在の耐えられない軽さ』のテレザとトマーシュにとって、二人を引き裂く最も深刻な障壁は、トマーシュの浮気とそれに対するテレザの絶望である。トマーシュは、自ら性愛的友情と呼んでいる女性たちとの関係を絶つことができない。女性への欲望を抑えられないばかりか、彼の浮気は妻テレザとの関係を妨害するものではないと確信しているのである。テレザは、強制収容所と同様、私的領域を持つことが許されない母親の世界を逃げ出し、トマーシュのもとへやって来た。ところがトマーシュは、彼女の身体をほかの女性たちの身体と同じように扱うことにより、ある身体が別の身体と区別されない、強制収容所の世界へと彼女を送り返した。

トマーシュの浮気という障壁により引き裂かれた二人ではあるが、それでも彼らは、二人だけの秘密の世界を尊重し、暗号によって交信し合うことに合意している。まず、トマーシュが、彼の人生にとって重要な選択をするとき、テレザとの秘密に導かれていることを指摘したい。

二人が出会ったのは1961年頃である。七年近くをプラハで暮らし、1968年のソ連侵攻の後、チューリッヒへと移り住む。そして、チューリッヒでの滞在が半年程になったとき、テレザは置き手紙を残し、ひとりプラハへと発ってしまう。異国にて、頼れる存在がトマーシュだけであることを恐れたからである。トマーシュは、テレザがひとりプラハで生きるという考えに耐えきれず、二度とチェコから出国できなくなることを承知の上で、プラハへ戻る決意をする。ロシアの侵攻後、トマーシュがチューリッヒの病院で働けるよう尽力してくれた院長に、プラハへ戻るという決意を伝えると、院長は気分を損ねた。するとトマーシュは、テレザの行動や二人の事情を院長に打ち明けたいたいという欲求に駆られるが、思いとどまる。代わりに、テレザとの秘密

---

<sup>42</sup> *Ibid.*, p. 246.

<sup>43</sup> *Ibid.*, p. 305.

の世界に属する、ベートーベンの音楽への暗示を用いる。

院長は本当に気分を悪くしていた。

トマーシュは肩をすくめて言った。「Es muss sein. Es muss sein. そうでなければ [=プラハへ戻らなければ] なりません。そうでなければなりません。」

それは暗示であった。[…]

ベートーベンへのこの暗示により、トマーシュはすでにテレザのすぐそばに来ていた。というのも、ベートーベンの四重奏とソナタのレコードをトマーシュに買わせたのは彼女であったから。

その上この暗示は思ったよりうまくいった。院長は音楽好きであった<sup>44</sup>。

トマーシュは、院長に事情を説明して納得させるよりも、テレザが愛するベートーベンへの暗示に頼ることにより、院長には理解不可能な領域において、その場にいないテレザとの精神的な結びつきを確認する。

トマーシュは、政治犯の恩赦を要求する嘆願書に署名するよう依頼され、その依頼を拒否するときもまた、秘密の領域においてテレザと交信する。

外科医の職を追われ、窓洗いとして働くトマーシュはある日、最初の妻との間に生まれた彼の息子と週刊新聞の編集者に呼び出される。トマーシュは「プラハの春」の時代に、オイディプス神話に基づいて共産党員たちを批判する文章を週刊新聞に載せたことがあった。この文章に共感していたトマーシュの息子と編集者は、大統領に送る嘆願書への署名を彼に求める。しばらく逡巡した末に彼が署名を拒否するのは、テレザの幸福を最優先に考えたからである。

彼 [トマーシュ] は言った。「嘆願書を送るより、生き埋めにされたカラスを助けるほうがずっと大事です。」

彼は、この言葉が理解不可能であることを知っていて、それゆえにこの上なく満足していた。彼は思いがけない陶酔を突然に味わった<sup>45</sup>。

この前日、テレザは買い物の帰りに、子供によって地面に生き埋めにされたカラスを見つけ、掘り出して家に連れ帰った。負傷したカラスを抱きかかえるテレザの姿が心に浮かぶと、トマーシュはテレザ以外に大切な存在はないと痛感する。署名を拒否するために彼が発した言葉は、編集者たちにとって、また、ほかの誰にとっても理解不可能なものである。テレザとの間でしか通

---

<sup>44</sup> *L'Insoutenable Légèreté de l'être*, pp. 53-54.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p. 316.

用しない秘密の暗号は、トマーシュに思いがけない満足感と陶酔を与える。

テレザもまた、トマーシュとの秘密を大切に、彼との約束に忠実であろうとする。たとえ不貞を働き、トマーシュを裏切るときであっても。

トマーシュの浮気に絶望するあまり、「愛と性行為とは何の関係もない<sup>46</sup>」という彼の言葉を確かめたいと望むテレザは、給仕として働くバーの客である技師の誘いに乗り、その部屋を訪ねる。技師の住居は質素であるが、本は何百冊も置いてある。本棚にソフォクレスの『オイディプス』の翻訳を見つけたテレザは、そこにトマーシュからの合図を読み取る。

彼〔技師〕がカーテンの陰に消えると、彼女〔テレザ〕は本棚に近づいた。一冊の本が彼女の目にとまった。ソフォクレスの『オイディプス』の翻訳であった。知らない人の家でこの本を見つけるとはなんと奇妙なことだろう。数年前、トマーシュはその本をテレザに贈り、注意深く読むように勧めた。それからその本について彼女にいろいろなことを語った。やがて新聞に論考を発表し、その記事は彼らの生活を大混乱に陥れた。この本の背表紙を眺めていると、彼女の心は落ち着いていた。まるで、トマーシュが意図的に足跡を付け、自分ですべての手はずを整えたことを伝えるべく伝言を残したようであった<sup>47</sup>。

テレザは『オイディプス』の本にトマーシュからのメッセージを読み取るが、もとはと言えば、トマーシュをオイディプス神話の世界へと引き入れたのはテレザの存在であった。

彼女〔テレザ〕は彼〔トマーシュ〕のベッドに身を横たえ、彼は枕元にいた。これは、誰かが籠に入れて、水の流れに沿って彼へと送り届けた子供であると確信しながら。

それ以来、捨てられた子供というイメージに愛着を持ち、このイメージが現れる古代の神話のことをよく考えた<sup>48</sup>。

故郷を捨ててプラハへやって来たテレザの姿により、籠に入れられ、流れ着いた捨て子というイメージを得たトマーシュは、オイディプス神話に興味を持ち、この神話に基づいた考察を新聞に発表する。テレザにとって技師の部屋にあった『オイディプス』の本は、トマーシュを象徴し、二人を結びつける秘密の記号である。テレザは、姦通によりトマーシュを裏切るときでも、

---

<sup>46</sup> *Ibid.*, p. 220.

<sup>47</sup> *Ibid.*, p. 223.

<sup>48</sup> *Ibid.*, p. 253.



彼が示した暗号に導かれている。

ここで、『存在の耐えられない軽さ』において副次的に展開するサビナとフランツの物語を参照したい。ジュネーヴへと亡命したサビナとスイス人の大学教授フランツの恋は、さまざまなすれ違いや誤解のため破局に至る。やがてサビナは二人の関係について回想し、考察する。

もし彼らがもっと長く一緒にいれば、おそらく二人は少しずつ、互いが発する言葉を理解し始めただろう。彼らの語彙は、臆病な恋人たちのように、慎重にゆっくりと歩み寄り、二人の音楽は互いに溶け合い始めただろう。しかし今では遅すぎる<sup>49</sup>。

失った関係を惜しむサビナは、もっと長い時間を共有すれば、二人は互いの言葉を理解し合い、調和のある音楽を奏で始めただろうと推測する。

しかし、恋人たちの関係についてのこの仮定に対し、クンデラの小説全体は否定的な結論を突き付けている。長い時間とともに過ごし、言葉によって理解し合う恋人同士など、彼の小説にはひと組たりとも登場していない。クンデラが描く恋人たちは、言葉や肉体の直接的な交流により愛し合うわけではない。彼らは、障壁により引き裂かれるほどに相手を思い、二人を結ぶ秘密を守ることだけを心の支えとする。

\*  
\*\*

「秘密」への権利の侵害は、国家や党による抑圧システムとして、また、家族などの身近な人間関係においても行われる。それは決して、共産圏に固有の現象ではない。「秘密」に注目してクンデラの小説を読み直すと、国家レベルの権力と個人との対立が解消され、共産圏の独自性が失われる。クンデラは小説において、権力に抵抗する個人や、共産主義社会の現実を伝える亡命作家として語るわけではない。

しかし、クンデラが描く引き裂かれた愛に解釈を加えるなら、恋人たちの悲しい運命が、作家自身の経験に裏打ちされた、悲観的な人間観を映しているように思われてならない。恋人たちを引き裂く障壁は、はたして、人間関係に対するクンデラの眼差しを暗示しているのだろうか。それとも、それは誰の心にもある深淵の形象なのだろうか。

---

<sup>49</sup> *Ibid.*, p. 182.